

講演

メソジスト信仰運動の愛餐をめぐる

深町正信

I. 聖餐（ユーカリスト）と愛餐（アガペー）をめぐる

近年、日本キリスト教団では聖餐をめぐる、色々な議論がなされています。聖餐は洗礼を受けたものだけがあずかる事が出来るとするオーソドックスな理解と、信仰告白をしない未受洗者にも開かれているとする、いわゆる開かれたオープン・コミュニオンの方の意見とであります。聖餐（ユーカリスト）は説教（ケリュグマ）と並んで、教会が主イエスを証する業として大切に保持して来た教会の業であります。その起源は主イエスを囲んでなされた供食や愛餐（アガペー）にあったとしても、現在では食卓の中心に主イエス様を見る姿でもなくなった交わりであります。主イエス様の臨在を確信し続けるためには、更に、十字架の死に集約された主イエス様の十字架による贖罪の出来事を想起し続けるために、教会はこの聖餐の儀式を導入したのであります。

「開かれた聖餐」ということは直ちに「未受洗者の陪餐」の意味であると理解するのは大きな過ちを犯すことになるのではないかと思います。「開かれた聖餐」という言い方は不十分であり、また不正確であります。むしろ、「未受洗者の陪餐」と明確に言うべきであろうと思います。勿論、「知的ハンデキャップをもつ人の陪餐」「幼児洗礼者の陪餐」「こどもの陪餐」「他の教会員の陪餐」は大いに論じるべき事柄であり、特に、メソジスト教会は幼児洗礼者に陪餐にあず

かることを認めてきたのであります。更に、最近では、カトリック教会のミサや葬儀のとき、プロテスタント教会の兄弟、姉妹も聖餐の恵みに共に与かるようにと招かれることは大変に嬉しいことでもあります。

聖餐式において、実在のキリストと対面することに全力を集中することが大事であります。なぜならば、キリストは、「これは私の体である。これは私の血である」と言われ、さらに、「これを行いなさい」と言って、聖餐において、パンとブドウ酒により、ご自分が実在し、そこで、ご自分の体と血とを与えることを約束されたからであります。このキリストの言葉は「空しい言葉でなく」、「真実の言葉」であるとするならば、聖餐において確かにキリストは実在され、私たちはキリストの命にあずかる事が出来るのであります。

II. 愛餐の意義とその起源について

初代メソジストと呼ばれた人たちにより規則的に行われていた儀式としては聖餐と、もう一つ愛餐があげられます。これは英語で言うと「Love feast」が行われていました。これは明らかに、その起源を聖書のうちに見出だすことができます。これは初代教会においてキリスト者たち行っていた「アガペー」と呼ばれていた出来事に、その起源があることは明白であります。このことについてはコリントの信徒への手紙一、第11章17-34節とか、ペトロの手紙二、第2章13節、エフェソの信徒への手紙5章18-19節、使徒言行録2章46節等の箇所が、そのことを明らかに記しています。

たとえば、エフェソの信徒への手紙を見ますと、「酒に酔い知れてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、詩編と賛美と霊的な歌によって、語り合い、主に向かって心からはめ歌いなさい」とあります。

したがって、初代メソジストと呼ばれる人達が行っていた愛餐とは、ある意味で初代教会の行っていた聖書に忠実にしたがった「一種の礼典復興運動」であるとも言えるのであります。これは主にある私たち相互間のキリストにある一致と連帯を象徴する儀式でありました。

初代教会において、キリストを信じる者達は愛を意味し、又、時として兄弟愛を意味するギリシャ語の「アガペー」と呼ばれる一緒の食事をする共同の食

事を、彼等の間でよく行っていました。しかし、時代の経過とともに、その意味が次第に変化し、今日で言う単なる慈善、慈悲、チャリティーの食事会に変化してきました。

バックスター教授はその著書「メソジズムに帰れ」の中で、この愛餐の起源とその意義について簡潔に、しかし、明瞭に説明をしています。「主イエスが言われた。「父よ、彼等を赦してください。彼等は何をしているか判らないのです」という主イエスの言葉を理解するに至りました。使徒ペテロはエルサレムの町にやって来て、その主の赦しと愛について説教をしました。その結果、3000人ももの者達の魂が自らを恥じて、罪のない神の小羊を殺すことに加担したことを認め、心をいたく痛めました。このようにして彼らは悔い改めをなし、そして、主の教会に加わり、福音を宣べ伝えることを始めました。使徒達は町の中の何軒かの家で教えていた者たちを幾つかのグループに分け、日々、集まり、そこで礼拝を守り、そして「アガペー」、つまり、愛餐と呼ばれる共同の食事を共にして喜び、かつ楽しんでいた」と述べています。

この文章からも、愛餐というのは、初代教会において、主イエスの十字架の贖罪愛を覚えつつ、共に同じ食事をとり、お互いに励まし合い、祈りを共にする主にある愛の交わりの機会でありました。この意味で、愛餐は、主イエス様の定められた聖餐の儀式とは異なる性質のものであったということはありません。

更に、リー教授は「ウエスレーにとり、すべてのことは、その目的が神の愛の個人的意義を確かめるためでありましたが、このことは何らかの手段を用いずには何事もなされなかった」と述べていますが、愛餐の問題でも、そこにはやはりウエスレーの信仰的プラグマティズムを見ることができると思います。

しかし、この愛餐の儀式はやがて次第に変質し、慈善的晩餐、つまり、チャリティー・サパーとなり、ついには第三世紀になると、全く衰退してしまい、当初の意義を全く失ったものとなってしまいました。その主な原因は、愛餐と聖餐とが混同されたり、又、ついには、愛餐が単なる慈善のための食事会と変質してしまったからであります。

Ⅲ. モラヴィアンの人々との愛餐

初代教会の時代から更に時間が過ぎて、1726年、有名なツィンツェンドルフ伯爵によりよび集められたルターの信仰を継承したモラヴィアンの兄弟団の人々は再びこの長く失われてきた愛餐を取り上げて、彼等の宗教的喜びと社会的交わりに共に与かるための大切な場所として回復しました。

彼等は日頃から初代教会の時代の信仰と伝承とを重視し、これを維持しようと熱心に願い求めていました。したがって、彼等は当然、初代教会の行っていた「愛餐」を復興し、これを実施しようとしていました。このことは現在も、彼等もモラヴィアンの人々により固く守られ実施されていることであります。

ツールソン博士はその著書「モラヴィアニズムとメソジズム」と題する書物の中で次のように述べています。「モラヴィアンの兄弟たちにより行われていた「愛餐」は、初め私的な性格のものであった。結婚式、聖日の夜などのように特別の場合に、ツィンツェンドルフ伯爵の邸宅で催されました。そして、極く僅かな者たちがこれに出席しましたが、やがて長老たちも、彼等の自身の家で、愛餐を催すようになりました。そして、これら各自の家々で、同じような会合で、モラヴィアンの兄弟達は初代教会の交わりの回復することを目指したのでした。すなわち、愛餐と呼ぶ食事を共にしながら、彼等は歌をうたい、罪の悔い改めをし、そして、信仰的、靈的経験を交換することにより主にある交わりを暖めたのであった」と述べています。

彼らは、愛餐のとき、ライ麦と水だけの簡単な食事を一緒にとりました。そして、「私たちの心の中に、主イエスが常に共にしてください」とお互いに祈り合いました。やがて、この愛餐は一部のものたちのものから、全く会衆のためのものとなり、一つの儀式となったのであります。このように、モラヴィアンの兄弟間の行っていた愛餐は、新約聖書に書かれている初代教会の「アガペー」の復興であり、聖餐式に先んじてなされていた信徒たちの共同の食事でありました。

このことが恐らくジョン・ウエスレーをして、彼等の守っていた「愛餐」に深い意義を感じさせ、それに目を止めさせた主な理由ではなかったかと思われるます。

IV. ジョン・ウエスレーの最初の愛餐との出会い

モラヴィアン兄弟団の宣教師と移住者たちはこの愛餐の習慣を新大陸アメリカへ持ち込みました。1737年8月8日に、サバンナで、ジョン・ウエスレーが初めてかれらの催した愛餐に出席しました。彼はこの時の経験を、彼の日記に次のように記しています。

「夜の祈りのあと、私たちは彼等の愛餐の一つに、私はドイツ人たちと一緒に与かったそれは神様への感謝の祈りに終始し、そして、使徒時代にキリスト者が、キリストに相応しいものと見られるように厳粛そのものであり、且つ、折り目正しく行われました」と書かれています。

ウエスレーの愛餐についての関心は、これが原始キリスト教会の行事の復興であるということにありました。この点について、ウエスレーは彼自身次のように書いています。「メソジズム、このように呼ばれているものは古い宗教であり、聖書の宗教であり、初代教会の宗教であり、そして、英国教会の宗教である」と述べています。

ウエスレーは常に聖書と伝統とに堅く立とうと考えていたので、この初代教会の行っていた愛餐に深い関心と興味を向けたのは当然のことです。1738年6月13日から9月19日にわたるヘルンフート滞在中に、ウエスレーは彼の生涯で最も印象に深く残る愛餐を体験しました。彼はその愛餐について次のように記録しています。「心の喜びと単純さ、賛美と感謝の声をあげつつ、その食事とともに与かる。「結婚した男性のための愛餐」が午後4時から行われました」と記されています。

更に、シュミット博士は彼の著書「神学的伝記、ジョン・ウエスレー」の中で次のように記しています。「ドイツのヘルンフートへの旅行により、ウエスレーはモラヴィアンの兄弟たちから豊かな礼典的生活の真の画像を得た。ある時、「結婚した男性のための愛餐」が行われました。それは初代キリスト教のアガペーの食事の現代的再現でありました」と彼の感想を率直に記しています。

1738年2月1日に、ジョン・ウエスレーはアメリカのジョージアからロンドンへ帰国し、同年5月1日、モラヴィアンの若き指導者、神学者ピーター・ベ

ラーと共に、「ザ・フェターレイン・ソサイティ」を結成しました。ウエスレーは彼からルター的義認信仰の影響を非常に強く受けていますが、彼等の神秘主義的傾向を批判し、数年後には彼等から離れて、この組織から離れました。

1738年10月1日と11月5日、12月3日、12月31日に、それぞれの愛餐が執行されなければなりませんでした。

これらの日に行われた「ザ・フェターレイン・ソサイティー」で、彼が守った愛餐はウエスレーにとり、特に印象深いものであったようです。そこには次のように記録されています。ホール (Hall) キッチン (Kitchen), イングハム (Ingham) ホワイトフィールド (Whitefield), ハッチンズ (Hutchins), そして私の弟、チャールズ (Charles) 等、その他に、私たちの兄弟たち総数 60 人と一緒にここ「ザ・フェターレイン・ソサイティー」での愛餐会に参加していました。私たちが神の権威の臨在に気付き、驚き始めるや否や、私たちの間に一つの叫び声が満ち溢れあふれました。「私たちはあなたを賛美します。おお、神よ、私たちは私たちの主であられるあなたに感謝を申し上げます」と、その感動を記しています。

このことから、この愛餐がジョン・ウエスレーの生涯にとり決定的に重大な時であったことが判ります。そして、この時以来、愛餐はメソジストの人々の間でもしばしば催されるようになりました。

サイモンズ博士は「ジョン・ウエスレーと宗教的会」と題する本の中で、先の事件および、その他の愛餐についても詳細に研究しています。1739年2月4日(日)に、「ザ・フェターレイン・ソサイティー」で別の愛餐が行われました。これは「男性のためのみの愛餐」の会合でありました。更に、2月18日に、「婦人のための愛餐」の会が開かれています。彼等は何故このように彼等の愛餐を性別に別けて実施したのでしょうか？ F・ペーカー博士は、彼等の性別分離の習慣こそがモラヴィアンの愛餐の特徴であったと説明しています。更に、この男女分離の実際的理由としては、個人的告白等のときに、異性がいることは不便を感じるからであったと説明しています。

ブリストルでは、婦人たちが1739年4月15日、又、男性たちが4月19日、それぞれ第一回の愛餐を催しています。このような急速な愛餐の普及、或いは、愛餐の拡大は同時に、愛餐は間もなく彼らの間で不和と論争の原因になったこ

とを見落としてはいないと指摘しています。

1740年4月13日、女性のための愛餐が「ザ・フェーター・レイン・ソサイティー」で行われました。この頃、P・モルサーに代表されるモラヴィアンとウエスレーとの間に静寂主義論争がその頂点に達した頃でありました。やがて「ザ・フェーター・レイン・ソサイティー」のメソジストたちとモラヴィアンたちとの決定的断絶がこの時を境にして急速に深まっていきました。その結果、特別な愛餐が1740年7月13日に、キングスウッドで行われることになりました。この愛餐について、弟のチャールズ・ウエスレーは彼の日記の中で次のような感動的文章を綴っています。「200人の者達がイエスの精神において集められました。私は今までに、このように信仰心の深い会衆を見たことも、また、それによって感動せしめられたこともなかった。私はヘルンフートのモラヴィアンが、私たちにこのようなものを今与える事が出来るかを疑問に思います」と書いています。

V. メソジストの愛餐をめぐる

このようにしてメソジズムは今や、急速にヘルンフートのモラヴィアンの影響から離れていきました。そして、ついに1742年に、「ザ・フェーター・レイン・ソサイティー」での聖日礼拝に引き続いて行われた愛餐がモラヴィアンとの最後の決別の時となりました。後に、ウエスレーはこの1742年2月になされたモラヴィアンの愛餐について激しく次のように批判しています。「11時間以上もの間、すべての者達が静寂のままでした。賛美歌も、祈祷も、勧めすらも全くありませんでした。そこでS氏が言いました。わたしの姉妹たちよ、わたしは心の中にどれくらい、聖書の名前が覚えられているかを考えていました」。このようなモラヴィアンの愛餐に対する激しい非難にもかかわらず、メソジズムがその後も愛餐を守っていたことは、「ザ・フェーター・レイン・ソサイティー」との断絶の後にも、彼の日記の中にしばしば愛餐のことが見えることから明白であります。

むしろ一般の愛餐は以前よりも頻繁に彼等メソジストの間で行われるようになってゆきました。そして、ついには彼らの間でいくつかの会が合同して愛餐

を開くようになりました。1740年12月21日の日記にはそのような愛餐について記しています。

1740年12月。ウエスレーは三つの慈善の愛餐会。すなわち、ロンドンとブリストルで二か所の愛餐会に出席しました。一方、弟チャールズはロンドンから遠く離れたニューカッスルとセント・アイブに於ける愛餐について記しています。これらの記事からも、その当時、愛餐がメソジストの間で相当に広範囲にわたって行われつつあったこと、そして、メソジストの中心的部分を占めるに至っていたことが判ります。たとえば、5月19日、日曜日に、ウエスレーはニューカッスルの一角で説教しました。メソジストの教会を離れていた者達はそれにより心から感動させられ、教会に復帰しました。そして、その日は実に愛餐をもって締めくくられました。

この愛餐こそは明らかに、その町で催された初めてのものでした。1744年6月25日から30日にかけての第一回メソジスト会は日曜日に愛餐をもって開始されました。1748年に、ウエスレーがヴィンセント・ペロネット (Vincent Perronet) 宛に書いた「キリスト者の完全」は、ウエスレーが愛餐をメソジスト運動の必要かつ最も価値ある部分として考えていたことを如実に示しています。

VI. メソジストの愛餐をめぐって

メソジストの愛餐の用法としては、飲み物は大抵の場合に、二つの手のついた円筒形の茶碗から配られた水、ある場合にはお茶 (tea) でありました。そして、食物は初めにパンとビスケットでありましたが、やがてやや甘いパンに変えられました。それらのものはお盆や皿にそれぞれ分けられました。しかし、時には布製のカゴの中に盛られて用意されました。最初、モラビアンたちの間での愛餐のときの食物はパンとブドウ酒でした。しかし、すぐに、前に述べたようにパンとブドウ酒は愛餐を聖餐式から明確に区別するためにお茶とクッキーに変えられました。

初代教会での愛餐は先に述べたように慈善の機会でもあったと同様に、メソジストの愛餐においても献金が集められました。それらは大抵の場合、貧しい人々、困窮したもののたち、孤児、未亡人のために捧げられ、用いられました。

どのようなメソジストの会合、集会でも当然のこととして献金が、愛餐のようなときにも、特別にも集められたことは大変に意義深いことだったと思います。1789年、メソジストの協議会は、愛餐で集められた献金は、貧しい人々のために最も有効に用いられなければならないとの規定を設けるようになりました。

やがて、初期のメソジスト協議会は愛餐の催されるべき正確な日時を決定しました。たとえば、1763年の大会議録は国中の補助者が愛餐をバンドのために月毎に実施し、また、すべての協会のために1年に1度は愛餐を行うことを正式に決議しています。しかし、1780年になると、年に4回、2回、そして、ついに年1回しか愛餐が行われなくなりました。しかし、主な教会では愛餐を午後12時に計画し、礼拝のその場所で、午後2時頃から始めました。これに反対して、ある教会では全然そのような機会をもたず、聖餐式のみを執行し、又、その反対に、極一部には愛餐のみを行い、聖餐式を全然行わないところもありました。

更に、愛餐は最盛期の頃には日曜日だけでなく、1週間のうちいずれの日でも行われていました。特に、私たちが注目したいことは、愛餐が四季会において必ず行われていることであります。また、特に、ウエスレーの生存中は、愛餐が多く協議会との関連で催されたことであります。

メソジストの重要な出来事はこのように愛餐により意味づけられていました。このことは愛餐が如何に重要視されていたかを示すものであると言えるかと思えます。ウエスレーは彼自身、次のように愛餐について説明をしています。「すべての神の恵みの喜ばしい意味をバンドの会員たちの内を強めるために、私たちは4回に1晩、会に属する男性のために、また、2晩目はすべての婦人のための会をもち、そして、3晩目には男女双方のために会をもちました。それは私たちが初代キリスト者がなしたように、パンを共に食するためでありました。そして心の歓喜と従順さを得るために、このような愛餐において、私たちの食事は極く小さなケーキと水だけで足りました。私たちは永遠の生命に至る食事にあずからずには、それらの愛餐から戻って来る事は決してありませんでした。

そのようにして一緒に食べ、飲み、そしてメソジストの会員たちは彼等の霊的生活、克己、信仰の勝利、希望、畏れ、敬虔等について語り合いました。このようにして、遂に後には単に、隊（バンド）だけでなく、すべての組（クラ

ス)の会員がこの愛餐に参加することを認められるようになったのであります」と、ウエスレー自身記しています。

ここから、私たちはメソジストの愛餐がどのような形式で行われ、どのような目的で実施されていたかを具体的に知る事ができるのであります。

F・ベーカー博士の研究によれば、メソジストの実施していた愛餐は次のような順序で通常実施されていました。1、賛美歌、2、祈祷、3、感謝、4、奉仕者によるパンの分配、5、貧しい人々への献金、6、愛のカップをまわす、7、在任牧師の勧め、8、証しと賛美歌、9、即席の祈祷と賛美歌、10、牧師による閉会の勧め、11、賛美歌、12、祝祷

このような順序で行われていました。しかし、この他にも幾通りかの愛餐の順序がありました。

愛餐がどのような場所で行われていたのかについて簡単に触れると、愛餐は一般に会堂（チャペル）で実施されていました。このことはメソジストの会員が当時、英国教会から異端視されていて、教会（チャーチ）で礼拝を守ることが出来なかったからであります。

したがって、愛餐はメソジストと呼ばれる人々により、教会堂でなく、会堂でなされた信徒の交わりを深めるためにとても大切なことであります。しかし彼等は会堂以外にも、その愛餐の場所として、山小屋、個人の家屋、ゲンスポールのオールド・ルーム等も用いて、愛餐を行い、メソジスト信仰復興運動の霊的担い手としての結束を深め、強めていました。

VII. メソジストの愛餐の特徴

トウルソン博士の「モラヴィアンとメソジズム」によれば、ウエスレーは第一に、モラヴィアンを通じて、愛餐において多くの証しの時をもちました。1761年3月1日、ウエスレーは愛餐における証しについて「私たちの兄弟の多くは、神が彼等の魂にされたことにつき、単純、率直に語った」と記しています。このようにメソジストの行った愛餐のプログラムの中心は愛の交わりであると共に証しにあり、その際、一緒にとる食物と飲み物は彼等の霊的分け前にあずかる象徴的な事柄としてなされたのであります。

更に、彼は 1785 年に、ロンドンでの愛餐の模様について書き記して、その際に多くの回心者さえ出たことを喜びをもって次のように記しています。「感情を高ぶらせる小さな驚き、新しい再献身の呼び声、そして回心者さえもが愛餐のとき、しばしば出現するようになった」と記されています。更に、彼はこの点について次のように述べています。

「いくつもの愛餐において回心者が生まれました。1793 年、クリスマスの日、ブリストルで 50 名、1794 年復活節。同所で 50 名以上。そして、ヴィヴァレイとホールで同じ数の回心者が与えられた」とあります。このようにして、メソジストの愛餐は証しを中心として、回心者を生み出す場となり、そして、ついに愛餐はバンドからすべての会員にまで出席の権利が広げられていきました。第二に、メソジストはモラヴィアンのように、愛餐のとき、よく賛美歌を歌いました。もし愛餐のとき、即席の証しがないときには、賛美歌を歌うのが慣わしでありました。そして、それらの賛美歌の多くは、愛餐のためにつくられたものでありました。

F・ベーカー博士はこの問題について「チャールズ・ウエスレーの代表的詩」という本の中で深く論述しています。ここで、一つだけ愛餐のための代表的賛美歌を引用したいと思います。これは現在、アメリカのメソジスト教会の使用している賛美歌 748 番であります。

「来れ、喜びに加われ、キリストを聖歌で賛美せよ

われらすべてに一致を与えよ、われらの主に栄光をさせよ

全身、全霊、声をあげよ、昔の如くに歌え、

喜びを先んぜよ、愛餐を祝おう、

しかし、やがて愛餐は多くの人々に疑惑と混乱を引き起こして、初代教会の場合と同じような事情に陥ってしまいました。それは多くの熱狂主義者、異端者たちの出現によるものでした。メソジストの愛餐の場にもそのような熱狂主義者たちが現れ始めたからでした。そこで、ウエスレーはメソジストの愛餐の良い慣わしを守るために、いろいろの厳しい規則をもうけたのは、このような理由からでした。その結果、愛餐はウエスレー自身に対して直接責任を取っていた Assistant (補助者)、または教区長の監視のもとに厳しく実施され、またその責任のもとに置かれるようになりました。

ウエスレーの死後、メソジストの協議会は再びこの点を強化する必要を感じました。1796年の会議録を見ると、次のように記されています。「各地方の牧師は教区長の指示なしには愛餐を実施してはならない」。このようにして、愛餐は厳しい規制のもとに執行され、教会の教育的意図を一層明確にするようになりました。

ここで、愛餐の出席と深い関係のあったバンド・チケットやクラス・チケットについて少し触れたいと思います。1758年の協議会では、一年に一度、他の協会の愛餐への出席が承認されました。1759年12月5日、ウエスレーはファンダリーで全協会のための第一回目の愛餐を催しました。そして、間もなくメソジスト会の会員はバンドの会員証がなくても、また、クラス・チケットで保証されている者は、どこの愛餐にでも出席を許されるようになりました。しかし、ほとんどの場合、会員券のない者は絶対に集会への出席を認められず、特に、愛餐への参加は絶対に認められませんでした。これにはウエスレー自身の署名と、聖書の言葉、並びに、所属バンド、クラス、各々が印刷されたメソジスト会員のための身分証明書のようなものでした。

ここで愛餐にまつわる面白いエピソードを一つ紹介したいと思います。それは友人、知人からクラス・チケットを借りて、愛餐へ興味半分に参加するものが現れましたが、不思議なことに、そのような者達の中から、幾人かがキリスト教信仰への回心へと導かれるという出来事が起こりました。たとえば、ヒュー・ボーンやウィリアム・クラウド等という人は、このような会員券なしで出席した、愛餐の集会において回心を経験し、メソジストの会員に加わったと自ら告白しています。

このようにして愛餐は一つの協会（Society）を越えて、その範囲を更に大きく拡げてゆきました。たとえば、ウエスレーが1769年10月11日、に記されている集会がこの類いでありました。

メソジストの愛餐はこのようにして、メソジズムの中心的役割を果たすものとして大切に守られてきました。それは神の恵みに対し喜びと感謝の食事を一緒にあずかると共に、回心的手段としても重視されていたということでもあります。

VIII. 愛餐のもつ現代的意義

愛餐は現代に生きる私たちにとり一体どのような意義をもっているのでしょうか？この質問に対して、F・ベーカー博士は三つの事柄をあげていますが、私も全くこれに同感であります。第一は、愛餐は聖餐と違って、純粋に主にある交わりと一致を意味する愛の共同の食事であるということであります。したがって、愛餐は、現在の教派的に分けられた世界の多数のキリスト者にとり、主にある一致と交わりとの真の祝福の源泉となり得るということであります。聖餐は洗礼を受けて、教会の教会員となり、信仰をもった者しか受けられないものですが、愛餐は主にある愛の交わりを望むものならば、誰でも参加する事ができます。私たちは今後とも聖餐と愛餐との軽率な混同をしないように、十分に注意する必要があります。私たちは変容の正しい歴史的、教理的、神学的、正しい礼典の理解に基づいて、愛餐の現代的意義を追及するならば、愛餐が必ず今日のエキュメニカル運動に貢献するものとなるだろうと思います。

第二は、愛餐は教会に多くの信仰的遺産、たとえば、素晴らしい愛餐の賛美歌、良き証しの機会、即席の祈祷等を生み出してきました。愛餐を守る事は牧会的、教会教育的にも、多くのものを与えてきましたが、現代の世界教会的関心の強い時代において、メソジスト教会がより豊かな、真実なプロテスタンティズムの形成をするために大きく貢献することが出来ると思います。

第三に、愛餐はキリスト教各派の再合同への道を一步進めるための具体的に、教会の助けとなる一つ的手段として実践し易いものであると思います。この意味で、メソジズムは現代のエキュメニカル、つまり、世界教会再一致運動に於いて、各教派の教理的違いを越えて、愛餐によるキリスト者の交わりと一致を提唱することが出来るのであります。ある時、ジョン・ウエスレーは、カルヴァン派、ルター派、他の教派の人達に向かって、愛餐に加わることを勧めています。このことは彼が教理的違い、お互いの意見の相違にも拘わらず、それを問題視しなかったことを示しているように思います。更に、アメリカのメソジズムはリバイバリズム（信仰復興運動）とも結びついて、愛餐が超教派的な大きな役割を果たしてきたことを見逃すことができないと思います。

結びに、この愛餐は聖餐のように教会の大切な礼典の一つであるかどうかと

いう根本的疑問が起こってきます。F・ベーカー博士によれば、アメリカのメソジストのある人々は、愛餐がメソジスト教会の礼典の一つであると考えていたとしています。しかし、それは彼等が英国国教会から異端者と見做され迫害されて、主の食卓から除外されたとき、愛餐がそれに代わるものとして行われたのでなかったのかと考えられます。したがって、ウィリアム・クラーク博士によれば、アメリカのメソジスト教会にとり、愛餐ははっきりと礼典の一つと見做されていると主張しています。

しかし、サムエル・ブラッドバーン博士によれば、愛餐は主の定めた聖餐と全く関係のないものとして厳密な意味における礼典ではないと考えられてきたと主張しています。私見によれば、私は後者の意見が、アメリカのメソジスト教会の現実に近い意見であるように思います。しかし、前者の指摘するような歴史的事実や経過があったことも、客観的に見て、十分に認められることであろうと思います。

ウエスレーは彼自身何度も記しているように、全生涯を通じて、英国国教会の忠実な司祭でありましたので、当然のこととして、聖礼典を重視するハイ・チャーチ・マンの立場に立っていました。したがって彼は聖餐と愛餐との明確な区別をするために、聖餐のパンとブドウ酒の代わりに、愛餐では甘いパンと水、または紅茶を使用したのです。このことから彼が聖餐と愛餐とを混同して、愛餐を礼典とみなすような考え方を全くもっていなかったことは明らかであります。

ウエスレーは、愛餐を主イエス様の命じられた、主の愛を象徴する教会の美しい行為として尊重し、また、主にある兄弟、姉妹の会員相互の信仰訓練の場所として有効に行うことを考えたのです。ウエスレーが愛餐を全く礼典として考えていなかったことは彼の書いた「新約聖書略解」や「キリスト者の完全の教理」を見ても、明瞭であります。しかし、それにもかかわらず、彼には確かに、彼自身で気付いていないのですが、愛餐と聖餐とを混同しているかのような点も確かにあります。更に、彼がそのようにしなければならなかった歴史的事情も確かにあったことも事実であります。

私たちは現在のエキュメニカル、世界教会再一致運動の流れの中で、愛餐のもつ意義を再発見し、教会の分裂でなく、教会の再一致への鍵の一つとして愛

餐による愛の交わりを深めることは真に意義あることと思われまます。

(和泉短期大学・理事長)

参考文献

Frank Baker, *Methodism and the Love-feast*, London: The Epworth Press, 1957.

Frank Baker, *The Charge to Keep: A Charge to Keep: An Introduction to the People Called Methodists*, London, The Epworth Press, 1947.

Henry Bett, *The Spirit of Methodism*, London, The Epworth Press, 1938.

Abram Lipsky, *John Wesley: a Portrait*, NY, Simon Schuster, 1928.

Daniel Monart Baxter, *Back to Methodism*, Philadelphia, A.M.E. Book Concern, 1926.

Humphrey Lee, *John Wesley and Modern Religion*, Nashville: Cokesbury Press, 1936.

Clifford W. Towlson, *Moravianism and Methodist*, London, The Epworth Press, 1957.

Nehemiah Curnock, ed., *The Journal of John Wesley*, vol. 2, 4, 5, standard edition, London, The Epworth Press, 1907, 1927.

マルチン・シュミット『ジョン・ウエスレー伝1——回心の内的発展』高松義数、新教出版社、1985年

John. S. Simon, *John Wesley and the Religious Societies*, London, The Epworth Press, 1927.

ジョン・テルフォード『ジョン・ウエスレーの生涯』深町正信訳、ヨルダン社、1988年

Clifford W. Edwards. (ed) *Japanese Contributions to the study of John Wesley*, Wesleyan Collge Macon Georgia, 1969.